

第二章 薫中将の物語 薫の厭世観と恋愛に消極的な性格

[第一段 薫、冷泉院から寵遇される]

*二品宮の若君は(入道宮腹の源若様は)、*院の聞こえつけたまへりしままに(六条院故光君が生前に申し付け置きなされた通りに)、冷泉院の帝、取り分きて思しかしづき(冷泉院が特別に可愛がり申し上げ)、後の宮も(後の秋好中宮も)、皇子たちなどおはせず、心細う思さるるままに(御子たちがいらっしやらず心細く思いあそばしたので)、うれしき御後見に(張り合いを持って後見者として)、まめやかに*頼みきこえたまへり(手厚く世話して成長を期待申しなさっていらっしやいました)。*「二品宮(にはほんのみや)」は<女三の宮=入道宮>。朱雀院の肝いりで今上帝から「二品」という内親王としては最高の予算待遇を受けている(若菜下巻三章一段)。*「院の聞こえつけたまへりし」が何時の事なのか分からない。遺言なのだろうか。出家に際しての頼み事だったのだろうか。ただ、「ままに」は<没後の今も従前に変わらず>という言い方だから、今改めて<遺言に背かず>行なう事なのではなく、以前から続いていた生活様式のように聞こえる。この辺の時系列経緯はどこかで明示される事があるのだろうか。語り手は成人後の話を急いでいるのかも知れないが、私は事情を飲み込むのに非常に苦勞する。*「頼む」は<頼りにする>という意味があって、「皇子たちなどおはせず、心細う思さるるままに」を受けた文意だと<老後が心配で若宮を手懐ける>とか<楽しみが無い今の生活の心の拠り所にする>みたいにとれそうだが、また、そういう意味を否定する気も無いが、「頼む」には<期待する>という意味もあって、もっと即物的とか直に若君に接した気持として<その反応の一つ一つに成長を期待する>と素直に読んでみたい。

御元服なども、*院にてせさせたまふ(若君の御元服なども冷泉院が御所であげさせあそばしました)。*十四にて(14歳で若君は)、二月に侍従になりたまふ(二月に侍従にお成りで、)。秋、右近中将になりて(秋には右近衛の中将になって)、*御たうばりの加階などをさへ(冷泉院の口添えで四位という特別加階などまであり)、いづこの心もとなきにか(何か将来に不安でもあるのか)、急ぎ加へておとなびさせたまふ(院はとても急いで若君を出世させなさいます)。*「院」は冷泉院。史実の「冷泉院」は<平安時代の天皇の累代の後院(ごいん、譲位後の御所)の1つ。大内裏の東に隣接し、左京二条二坊、大宮大路の東・二条大路の北4町を占めた(現在の二条城の北東部分に該当)。多くの殿舎を備えた寝殿造であったという。>とウイキに説明があり、大辞林には<平安時代、京都堀川西にあった建物。弘仁年間(810-824)に嵯峨天皇が造営。その後代々の天皇・上皇が後院・里内裏(さとだいら)とした。>とある。ところで、この文の読み方だが、「院にてせさせたまふ」のは当然に六条院光君が故人だから冷泉院が親代わりを務めたのであり、過去形の叙述でないのは、この年の若君の一連の出世動向を説明しているのだろう。親の喪中に元服は慎まれるだろうから、やはり是は忌明けの事柄であり、光君は一年以上前に逝去したようで、しかし、あまり時が経っていないような語り口にも聞こえ、逝去は一年前からせいぜい二年前までの事だったように思ってしまう。ただ、それにしても、若君と冷泉院の親しさは更に幼少期からのような馴染感を思わせる書き方に見えて、もっと以前から、光君の出家に伴い入道宮が三条宮に移って、その時点から冷泉院が引き取った、とまでは考えにくい、母の入道宮が若君に強くは執着しなかったような、その隙を冷泉院と后が埋めたような、どこか微妙な距離感を思わせる設定だ。尤も是といった明示はなく、何とも手応えは無い。*「十四にて二月に侍従になりたまふ」は非常に重要な年齢の明示記事だ。私は今のところ、この一文を頼りに物語の全体構成を考える他は無い。この若君が生まれた14年前のことは柏木巻に記されている。当時で故光君48歳、入道宮22歳、故衛門督33歳、源右大臣27歳、今上帝22歳、明石中宮20歳、といったところだった。*「御たうばりの加階」は注に<『完訳』は「恩賜の加階。上皇らが特に指定する。皇族並に四位になった」と注す。>とある。冷泉院が特別に計らって加階させた、ということら

しい。二品宮の御子であれば、今上帝の御覚えも目出度いだろう。「たうばり」は<賜はり(「たまはる」の連用名詞)>の音便、と古語辞典にある。

おはします御殿近き対を曹司にしつらひなど(冷泉院は御自分の寝殿に近い対屋を若君のお部屋に設営するなど)、みづから御覧じ入れて(ご自身で部屋割りをお考えなさり)、若き人も、童、下仕へまで、すぐれたるを選びととのへ(若女房から童女や下働きの者まで優れた者どもを選び揃えて)、女の御儀式よりもまばゆくととのへさせたまへり(女部屋の模様付けよりも派手に飾り立てさせなされたのです)。「おはします御殿」は注に<主語は冷泉院。冷泉院の住む院の御所の中の近くの対の屋。>とある。「御殿(おとど)」は正殿、寝殿造りなら寝殿のことだろう。それにしても、冷泉院は危うい事情を抱えた存在で演出が難しかった所為か、本編では徹底的に脇役に置かれて、在位中の様子なども必要最低限の登場しかなく、いや最低限にも満たないほどの少なさにさえ思えて、よほど光君の印象に支障がある存在なのかと疎外感さえ感じたが、此処に来て少しは生き生きとした演出が与えられそうだと慰められる気になる反面、何処までも作者に都合よく扱われる帝だという役割を思い知る。

上にも宮にも(御自分や後に)、さぶらふ女房の中にも(仕えている女房の中からも)、容貌よく(美人で)、あてやかにめやすきは(品があつて気の付く者は)、皆移し渡させたまひつつ(皆若君の部屋付きに異動させ為さつて)、院のうちを心につけて(若君が冷泉院を気に入つて)、住みよくありよく思ふべくとのみ(住み易く居心地が良いと思うようにとのみ)、わざとがましき御扱ひぐさに思されたまへり(若君を特に手厚い御待遇対象に御思いあそばされていました)。

故致仕の大殿の女御と聞こえし御腹に(弘徽殿女御と申し上げた冷泉院妃腹に)、女宮ただ一所おはしけるをなむ(内親王がお一人だけいらつしゃつたのを)、限りなくかしづきたまふ御ありさまに劣らず(この上なく大事に御育て申しなさつている女御の親御振りに劣らず)、後の宮の御おぼえの(秋好中宮の若君への御愛情が)、年月にまさりたまふけはひにこそは(年月を重ねるほど増していらつしゃるようなのは)、などかさしも(なぜそれほどまでに)、と見るまでなむ(と思えるほどなのです)。「こちじのおほいどののによご」は注に<故致仕太政大臣の女、弘徽殿女御。「濤標」巻で冷泉帝に入内。太政大臣の死去したことが初めて見える。>とある。弘徽殿女御は中宮に成り損なつたが、冷泉院の一歳年上という年齢の近さと秋好中宮に先んじて入内して、11歳の冷泉帝と12歳の弘徽殿女御は濤標巻五章六段に「主上もよき御遊びがたきに思いたり」と良い遊び相手同士だった事が明示されていた。「良い遊び相手同士」とは勿論、昼も夜もだ。で、冷泉帝は13歳の時に九歳年上の22歳だった前斎宮を第二妃に迎えた(総合巻一章)が、前斎宮は神職だったのだから未通女だった筈だが、六条御息所の血筋であり、藤壺宮の肝入りもあつて、床所作の素地が格別に高く、冷泉帝もそこに王家の風格を見たのだろう、と私は読んでいた。勿論、中宮位を勝ち取つたのは政治力学によるものだろうが、帝自身の納得は必要だ。その秋好中宮に子が無いのだから、弘徽殿女御やその他の妃にも冷泉帝は子が無く、つまりは種無しかと思つていたが、弘徽殿女御腹に女宮が一人だけ居た、というのは意外だった。それで后位を逸したのでは、藤原殿の無念が改めて思われる。その藤原殿も死去しているとのことだが、いつか何処かでもう少し詳しく語られる事があるのだろうか。此処に「故致仕の大殿」とあるだけでは、本編であれほど主要な役割を果たした人があまりに簡素な扱いに過ぎる。なお、この「故致仕の大殿」を<藤原殿>と私は多く言い換えてきたが、「藤原殿」という呼称は本文には無い。が、この人物を客観的に示せる一貫性のある表示は<藤原殿>であり、是は物語上の便宜呼称ではなく、史実に照らして当時の読者の普通の認識だった、と私は見ている。我ながら、実に分かり易い。

母宮は(実母の入道宮は)、今はただ御行ひを静かにしたまひて(今はただ仏道修行だけを静かになさって)、月の御念仏(光君の月命日ごとの御法要や)、年に二度の御八講(年に二度の法華經大法会)、折々の尊き御いとなみばかりをしたまひて(その他の折々の尊い御仏事ばかりをなさって)、つれづれにおはしませば(淡々と暮らしていらっしゃるので)、この君の出で入りたまふを(今は右中將となったこの若君が三条宮に出入りなさるのを)、かへりて親のやうに(逆に親のやうに)、頼もしき蔭に思したれば(頼りになさっていらっしゃるので)、*いとあはれにて(とても放っては置けずに、頻繁に訪れ申しなします。)、 *「いとあはれにて」の「にて」は上語を条件や理由の提示として下語に結果や結論を示す論理助詞で、此処では<いとしげし>などの下語が省略されているのだろう。よって、此処で校訂は句点とすべきだ。此処を読点として下に続けると「暇なく苦しく」に掛かって文意は通るようにも見えるが、それは子供の手紙を親が読むような見方で、意味を分かってあげる事が出来る、みたいなことで、語り手の言い方としては不備というか成っていない。注には此処の文意と構成について<薫が母女三の宮を。「いかで身を分けてしがなとおぼえける」に係る。「院にも」以下「暇なく苦しう」までは挿入句。>とあるが、だからそういう舌足らずの女房語りは私には納得できないので、同意しない。

院にも内裏にも、召しまとはし(冷泉院にも帝におかせられてもこの中將君をよくお呼び寄せなさり)、春宮も、次々の宮たちも、なつかしき御遊びがたきにてともなひたまへば(皇太子も下の王子たちも親しいお遊び相手に連れ立ちなさるので)、暇なく*苦しく(あまりの忙しさに)、「いかで身を分けてしがな(まったく体が二つ欲しいくらいだな)」と、おぼえたまひける(とお思いなさいます)。 *「くるし」は<つらい、嫌だ、不都合だ>などの語用が多いようだが、貴人相手に不平は言えないから此処では<大変だ>という自分の事情を言う他はない。

[第二段 薫、出生の秘密に悩む]

*幼心地にほの聞きたまひしことの(源中將君は幼少期にほの聞きなされた御自分の出生に普通とは違う事情がありそうな乳母たちの内緒話を)、折々いぶかしう(成人する時の女との肉体関係や出世に伴って知る組織や人間関係などから疑惑を深め)、おぼつかなく思ひわたれど(真実を知りたく思い続けなされたが)、問ふべき人もなし(事が事だけに問い質せるような相手は居ません)。 *「幼心地にほの聞きたまひしこと」は注に<『集成』は「実の父が柏木であることを、何かの折に耳にしたとでもいった趣」。『完訳』は「薫は、女房たちの内緒話などから出生の秘事を疑い、今では実父が柏木であることを感じとっているらしい」と注す。>とある。不義と不義の子は絶対秘だが、光君と藤壺の密通および冷泉帝の出生という帝位に関わる絶対禁忌に比して、衛門督と女三の宮の密通は、少なくとも衛門督にあっては、露見も辞さない、露見後の責任も取りたい、という気持はあって、その不貞自体には、むしろ光君と朱雀帝尚侍との火遊びに通じる挑戦意欲がちらつく隠し事の趣きがあって、禁忌までの認識は無かったように見える。しかし、その思いは女三の宮とは共有できず、というより女三の宮は幼過ぎて事の意味が分からないという稚拙さで、衛門督の手紙を光君に見つけられるという失態を演じた。この緩さが、冷泉帝出生の絶対秘とは違って、乳母たちの噂話に上った、みたいな事情だろうか。それでも突き詰めれば、女三の宮にとってこの密通はやはり禁忌であり、禁忌の子を宿した事に苦しんで出家した。そして、そんな衛門督の不遜が光君に許される筈も毛頭無く、衛門督は失意の内に没した。その遺児も今や成人して、ということは筆下ろしも済んで、と言っても14歳とのことだが、源中將君であり、ということは組織や人間関係を理解し、ごく幼少期に耳にした変な話の意味が分かるようになった、みたいな事情らしい。が、具体例は何一つ示されず、そうした事情を読者が読み解く事を当然とするかの、ともかく読者は

何とか辻褄を合わせなければ読み進めないで、何とも作者に都合の良い書き方だ。こんな無礼な文など読まなきゃ良さそうなもんだが、此処まで読んできた我が身可愛さに渋々読み進む。ってのも勝手な言い種だが。

宮には(実母の入道宮には)、ことのけしきにても(子供が不実の子である事を、その内実は愚か、それらしい疑いですらも)、知りけりと思されむ(気付いたとお思いになるのが)、*かたはらいたき筋なれば(不本意な事柄なので、表には出さずに内心で)、*「かたはらいたき筋なれば」の「なれば」は「独りごたれたまひける」に<表には出さずに内心で>を含意して掛かる。ので、此処で補語する。

「世ととももの心にかけて(常に気懸かりなのだが)、いかなりけることにかは(どういうことだったんだろう)。何の契りにて(何の因果で)、かうやすからぬ思ひ添ひたる身にしもなり出でけむ(こんな心穏やかならぬ事情を負って私は生まれてきたのか)。*善巧太子の、わが身に問ひけむ悟りをも得てしがな(仏陀が自分の存在意義を自問して悟りを開いたことに倣いたいもんだ)」とぞ、独りごたれたまひける(どのように独り言を仰っていました)。*「善巧(ぜんげう、ぜんぎょう)」は<仏語。人々の機根に応じて巧みに善に教え導き、仏の利益(りやく)を与えること。>と大辞泉にある。「太子」は<世継ぎの王子>。与謝野訳文に<善巧太子はみずから釈迦の子であることを悟ったというが>とあるので、仏陀が悟りを開いたことに準えた物言いらしい。

「おぼつかな誰れに問はまし、いかにして初めも果ても知らぬわが身ぞ」(和歌 42-01)

「私は誰と聞きたいが、此処が何処かも分からない」(意識 42-01)

*今までの例からして、直前に引き合いに出した「善巧太子」に関わる逸話や伝承に掛かった歌詠みかと勘繰ったが、何の注釈も無いし、ウェブを雑観してもそれらしい記事はヒットしない。全く以て「おぼつかな」。余談だが、この歌は当巻に於いては唯一の歌らしく、当巻が光君死後の続編の始まりであってみれば、この歌の「覚束無」あたりを巻名にしても良さそうに思う。「幻」の後の「不覚」というのも思わせぶりな感じだ。いや、如何でも良いんだが、この「匂兵部卿」という巻名が、どうも当初から手に馴染まない気がして、符と思う。

いらふべき人もなし(応えてくれる人も無い)。ことに触れて(中将君は何かにつけて)、わが身につつがある心地するも(自分の出生事情に何か問題がある気がするのも)、ただならず(落ち着かず)、もの嘆かしくのみ(心が晴れないまま)、思ひめぐらしつつ(思い巡らして)、

「宮も*かく盛りの御容貌をやつしたまひて(母宮も実際に女盛りの艶姿を尼姿にやつしなかって)、何ばかりの*御道心にてか(どれほど篤い御信仰心があって)、にはかにおもむきたまひけむ(早々にご出家なさったものなのだろう)。かく(やはり実際に)、思はずなりけることの乱れに(不本意な事態に)、*かならず憂しと思しなるふしありけむ(止む無く厭世観を抱きなさいた事があったに違いない)。*「かく」は身近な事実を指す。*「おおんだうしん」は<御仏道信仰心>。*「かならず」は<他ならず>。

人もまさに漏り出で、知らじやは(かつて噂話をしていた乳母たちは、ちょうど不倫の折に居合わせて漏れ出た端々の事柄から事情を知っていた、ということなのか)。なほ(それでもなお)、つつむべきことの聞こえにより(秘密にすべき話なので)、我にはけしきを知らずする人のなきなめり(私には事情を知らせる者が居ないのだろう)」と思ふ(と考えます)。「人もまさに漏り出で知

らじやは」は「幼心地にほの聞きたまひしこと」があった当時の事情を中将君なりに結論付けて納得した言い方、なのだろう。衛門督と入道宮との密通も、中将君が不義の子という事情も、世間一般には秘密は保持されているのだろう。でなければ、入道宮は平然と暮らしていられないだろうし、中将君も今の地位や人間関係に支障が出てくる筈だ。つまり、一般には知られていない不義密通なのだが、中将君は勘が良くて、不都合な大人の事情に気付き、乳母たちの僅かな言葉尻をも聞き逃さなかった、みたいなことなのだろう。そういう設定でなければ全体の整合性が取れないと思う。別の明示があれば見直すが、今のところはそういう事情として読んで置く。で、「人も」は<乳母たちも>だ。「まさに」は<ちょうどその不義の節に居合わせて>。「漏り出で」は<事が露見して>。「知らじやは」は<事情を知っていたというわけだろうか>。

「明け暮れ(母宮は朝に晩に)、勤めたまふやうなめれど(仏前読経をなさっているようだが)、*はかなくおほどきたまへる女の御悟りのほどに(修験者とは違って、ゆっくりとのんびり構えていらっしゃる女の御修行なので)、*蓮の露も明らかに玉と磨きたまはむことも難し(真理を悟って極楽往生なさるのも難しい)。*「はかなし」は<たよりない>だが、此处では具体的に仏教勉強の<量が行かない＝はかどらない＝はかばかしくない>という修行姿勢に集中力が足りない事を言っているのかも知れない。*「はちす」は極楽の花。「露も玉と磨く」は<精進が適う>だろうか。「あきらかに」は<悟って>と<見事に>の掛詞か。洒落た言い回しなのかもしれないが、さっぱり分からない。

*五つのなにがしも(女の成仏には五つの障害があるというのも)、なほうしろめたきを(更に案じられるので)、我、この*御心地を、*同じうは*後の世をだに(私が母宮の御罪障をいっそ死んででも晴らして差し上げたい)」と思ふ(と中将君は思うのです)。*「五つのなにがし」は注に<女人成仏の五障。>とある。「五障(ごしゃう)」は<女性のもつ5種の障害。女性は修行しても、梵天王(ぼんてんのう)・帝釈天(たいしゃくてん)・魔王・転輪聖王(てんりんじょうおう)・仏にはなれないということ。五礙(ごげ)。五つの障り。>と大辞泉にある。ワケが分からない。*「みここち」は<母宮の御考え＝修行でも晴らせない罪障＝罪悪感>だろうか。*「同じうは」は<どうせなら>だが、何が<同じ事>なのか。同様なのは<罪が晴れない状態>であり、その「罪」の表象である自分が存在する限りは、何を如何考えても、如何遣っても<変わらない＝同じ事>という心境、のように見える。*「のちのよ」は<死後、次世代>でもあるが<来世>でもあり、自分が「後の世をだに(来世にまで、行ってしまおうか)」と言うのは<死んでしまいたい>という出家と言うよりは自殺、願望だ。不義の証である自分が、その死を以て母の罪障を清算する、というのは、生命体の存在意味としては母子は別個体なので誤まった認識だが、罪という概念自体が実存する、ということなら論理としては成立しそうだ。とか言ってみたって、この手の暗い論理には論理で対抗しても限が無いので、大体笑い飛ばして済ます事が多い。しかし、それにしても此处に来て、オニのような難文が続く。仏教かぶれの悪乗りだ。

「*かの過ぎたまひけむも(実父らしい亡くなった藤権大納言も)、やすからぬ思ひに*結ぼほれてや(気が重くて極楽成仏できないでいるのかも知れない)」など推し量るに(などと考え合わせると)、*世を変へても対面せまほしき心つきて(あの世へ行っても会ってみたくなくて)、元服はもの憂がりたまひけれど(中将君は元服して現世社会に踏み出すのは億劫がりなだったが)、*すまひ果てず(断りきれなかったものの)、おのづから世の中にもてなされて(どうしても世間に馴染んで)、まばゆきまではなやかなる御身の飾りも(眩しいほど華やかに着飾るのは)、心につかずのみ(気が進まずに)、思ひしづまりたまへり(淡々としていらっしゃいました)。*「かの過ぎたまひけむ」は<あの亡くなったらしい人>みたいな言い方のようだが、実父の衛門督藤君のことらしい。が、中将君が何処まで実父を認識しているのかが分からない。それでも、死んでいる、ということを知っている、という

ことは、狭い貴人世界の事だから、故藤原君が特定出来ている可能性は非常に高い。ただ、その人物像を中将君がどのように捉えているのかは分からない。衛門督藤君は十三年前の二月だろうか、その一月にこの中将君の出産と、その直後の女三の宮の出家があり、それに観念を覚えたかのように息を引き取った。推定だが、享年 33。今も存命なら 46 歳で大臣に就いていた事だろう。 *「むすぼほる」は<結ばれて解けない>だが、注には<『集成』は「つらい思いに迷いを晴らすことなくていられようか。成仏が叶わぬのではないか、の意」。『完訳』「亡き柏木も往生できず迷っているのではないかと思う」と注す。>とあって、是も<故人が道に迷う=極楽へ行き着けない>みたいな言い方らしい。 *「世を変へても」は「同じうは後の世をだに」に通じる言い方で<逝ったあの世で>だ。 *「すまふ」は「争ふ」と漢字表記され<争う>でもあるが、むしろ<抵抗する、辞退する>という語感が強いらしい。「相撲(すまう)」は「すまふ」の連用名詞「すまひ」のウ音便らしい。競う、戦う、という覇権概念よりは、(我を)張り合う、という保全概念が根に在るようで、狩猟と農耕の違いみたいな感じがする。

[第三段 薫、目覚ましい栄達]

内裏にも(帝におかれても)、母宮の御方さまの御心寄せ深くて(母宮が妹御であることから中将君への御関心が深くて)、いとあはれなるものに思され(とても可愛い甥に御思いで)、後の宮はた(後の明石中宮はまた)、もとよりひとつ御殿にて(もとより同じ六条院で)、宮たちももろともに生ひ出で(御子の宮様たちと一緒に成長し)、遊びたまひし御もてなし(遊びなされた御関係を)、をさをさ改めたまはず(成人後も身分の違いを少しもお分けなさらず)、

「末に生まれたまひて(晩年にお生まれになった子で)、心苦しう(気が重いのは)、おとなしうもえ見おかぬこと(大きくなるまで見届けられない事)」と、院の思しのたまひしを(と故光君がお考えを仰っていたのを)、思ひ出できこえたまひつつ(思い出し申しなさりながら)、おろかならず思ひきこえたまへり(この腹違いの弟君を軽んずること無くお思い申しなさっていました)。

右の大臣も(源右大臣も)、わが御子どもの君たちよりも(自分の子供の若様たちよりも)、この君をばこまやかにやうごとなくもてなしかしづきたてまつりたまふ(この弟君を気遣って敬って接しお世話申し上げなさいます)。

昔、光る君と聞こえしは(昔に光る君と申し上げた故六条院大殿は)、さるまたなき御おぼえながら(それはもう比類ない帝の御寵愛を賜わりながら)、そねみたまふ人うち添ひ(妬みなさる人が居たり)、母方の御後見なくななどありしに(母方の御援助が無かったりであったが)、御心さまもの深く(思慮深く)、世の中を思し*なだらめしほどに(不穏な世情を鎮める政務をお執りなされたので)、 *「なだらむ」は<平穩に事を収める>という政治用語なのではないか。三十三年前という昔のことだが、疫病や台風で荒れた都を収める為に、時の朱雀帝は光君を明石から呼び戻した。実際の復興増産は土木政策が奏功したのかも知れないが、人心の荒廢は住吉神への恩顧で収束させたような濡標巻の話だった。

並びなき御光を(有り余る御才能を)、まばゆからずもてしづめたまひ(目立たないように隠しなされることに成功し)、*つひにさるいみじき世の乱れも出で来ぬべかりしことをも(そのままでは大変な政情不安に陥りそうだった王制から莊園制への世情の変化を、敏感に示し過ぎた若気の至りも)、ことなく過ぐしたまひて(上手く乗り越えなさって)、後の世の御勤めも*後らかしたまはず(来世のための功德を積む読経講も怠りなさいませんでした)。 *「つひにさるいみじき世の乱れ

も出で来ぬべかりしこと」とは、表向きの意味では光君と朱雀院の尚侍との醜聞を指すが、読者の知る最も深刻な事柄は藤壺宮との不義と冷泉帝の存在に違いない。それらの事柄が進行している現時点では、そこに生きる人々は自らの感性に応じて対処するだけだが、三十三年の時を経た今となれば、その時流の意味を王制から荘園制への移行が顕著に現れた時代と見る事が出来る、という語り口に見える。マ、王制とか荘園制とかいう語自体は現代語での社会制度史認識なのかも知れないが、こういう文を現代語で言い換える場合には、此处まで言わないと何を言っているのか分からないように思う。つまり、この文は、当時の世情を踏まえた、当時の現代語で、こういう事を言っているのだ、と思う。*「おくらかす」は古語辞典に<遅れさせる>や<後に残す>の他に<おろそかにする>という語用もある、とある。「後の世の御勤めも後らかしたまはず」は<出家時期を遅らせなさない>のではなく<読経を怠りなさない>という文意なのだろう。光君の出家生活については、結局語られていないし、三十三年前の帰京以降は法華八講などを熱心に催した記事は、必ずしも純粋な仏心かどうかは疑わしいものの、滯標巻以降随所に語られていた。なお、この「後らかしたまはず」で句点を置く校訂が、構文上も文意上も私には妥当に思える。理由は知らないが、この時期の作者が仏教に傾倒して、仏心で全てが収まるような考えの基に筆を進めているらしい印象は強く、この手の事柄で文を結ぶ傾向にも馴らされた。

よろづさりげなくて(そのように光君は万事に力みが無くて)、久しくのどけき御心おきてにこそありしか(長年と穏やかな御性格であったが)、この君は、まだしきに(この中将君はまだ経験も浅いうちに)、世のおぼえいと過ぎて(宮中での評判が高すぎて)、*思ひあがりたること(その期待に応えようとする自負心を)、こよなくなどぞものしたまふ(この上なく強く持っていらっしやいます)。*「おもひあがる」は古語辞典に<古典では「つけあがる」「いい気になる」という意味合いではなく、誇りを高くもって、低俗なものを排するさまを表わす>とある。そう読んで置く。

げに、*さるべくて(本当にそのように理想的で)、いとこの世の人とはつくり出でざりける(とても生身の人間として生まれ出たものではない)、仮に宿れるかとも*見ゆること添ひたまへり(仏陀の生まれ変わりかとも思える相を備えていらっしやいました)。*「さるべし」は<そうであるに相当する>で、「そうである」の中身は「思ひあがりたることこよなくなどぞものしたまふ」だから、それに「相当する」ということは、万人の期待に応え得る<理想的な人物像>みたいなことらしいが、その「理想」とするものは「仮に宿れるか」と語られているので<善巧太子=仏陀>の生まれ変わりが念頭に置かれているらしい。*「見ゆること」は視認できる特異点のことだろうが、此处での話題は人相かと思う。

顔容貌も(顔立ちも)、そこはかと(そこがこうだと)、いづこなむすぐれたる(何処と言って優れていて)、あなきよら、と見ゆるところもなきが(ああ美しいと見える所も無いが)、ただいとなまめかしう恥づかしげに(ただとても優美で尊く)、心の奥多かりげなるけはひの(懐深く慈悲深く物を拒まぬ度量の大きさが)、人に似ぬなりけり(普通の人とは違っていました)。

*香のかうばしさぞ(中将君の体臭の香り高さは)、この世の匂ひならず(この世の匂いではない崇高さで)、あやしきまで(不思議なほど)、うち振る舞ひたまへるあたり(居住まいなさっている辺りは)、遠く隔たるほどの追風に(遠く離れた風下まで)、まことに*百歩の外も薫りぬべき心地しける(まるで百歩香のように外まで届くような香りでした)。*「香(か)」は<かおり。におい。>、「かうばし」は<かおりが高い。においがよい。>、と古語辞典にある。「匂ひ(にほひ)」が香気だけでなく<内面の充実が表に現れたさま>を示す語であるのに対して、「香」は香気だけを言い、それも専ら好ましい香気を言うらしいが、「香(かう)」は<薫物、香料>や練り香などを服に焼き染めたものを示す語だったので、此处で「か」とだけ言

われても、それが<香り、香気>の事らしいとは思いますが、何のことを言っているのか判然としない。で、少し先読みすると、下文に「うるさがりて、をさをさ取りもつけたまはねど」とあり、わざわざ薫物を使わないと断りがあることからして、この「香」は中将君の生まれつきの<体臭>のことらしい、と知れる。体臭の強い人はいる。靴下の雑菌腐敗臭は論外だが、好ましい体臭の人は確かにいる。また、文脈というか語り口から推して、その中将君の体臭は墨の香料が似合いそうだ。ジャコウだろうか、そういう体臭の人が稀に居る気がする。が、「百歩の外も薫りぬべき」ほどの体臭の強い人などいるのだろうか。と以前なら、頭っから信じなかったかも知れないが、ちょっと前、数年前になるのかも知れないが、新宿西口郵便局の近くで物凄く体臭の強いスタイル抜群の黒人の女とすれ違った事があって、びっくりして振り返った記憶がある。明らかに香水とは違う、種類としては前にも嗅いだ覚えのある酸味があった体臭なのだが、その強さが本当に10m離れた雑踏でもはっきり分かるほどの、私の記憶では日本人とは段違いのものに思えた。決して悪臭ではなかったが、真近で嗅いだら如何なっちゃうんだろうと暫し数秒は立ち尽くしたほどだ。だから、こうした記事も全くの絵空事とも言えないとは思っているものの、もうはっきりとは姿も思い出せないあのすれ違った女の体臭の強烈さが思い出されて、この香気の話は妙に生々しさを感じる。*「百歩の外(ひやくぶのほか)」は注に<百歩の香を踏まえていう。>とある。「百歩香」については、鈴虫巻一章の女三の宮の持仏開眼供養の際に「名香に、唐の百歩の薫衣香を焚きたまへり」と一段にあり、二段には<北の廂の簀子まで、童女などはさまよふ。火取りどもあまたして(その者たちが香炉をたくさん使って)、煙たきまで扇ぎ散らせば(煙たいほどに名香を母屋や南廂のほうへ扇ぎ送っている)、さし寄りたまひて、「空に焚くは、いづくの煙ぞと思ひ分かれぬこそよけれ。富士の嶺よりもけに、くゆり満ち出でたるは、本意なきわざなり。講説の折は、おほかたの鳴りを静めて、のどかにももの心も聞き分くべきことなれば、憚りなき衣の音なひ、人のけはひ、静めてなむよかるべき」など、例の、もの深からぬ若人どもの用意教へたまふ。>と不慣れな童女らに注意する場面があった。遠くまで香る、というよりは、遠くで良く香る、ように処方された「空焚き」用の香だったのだろう。だからほんの微量を焚くものでもなさそうだが、だからといって、煙るほど焚くのは品が無いらしい。が、何れにしても、実物や実際の香りに接する機会には私には無さそうだ。

誰も、さばかりになりぬる御ありさまの(誰でも中将の位にも就こうかという御身分で)、いとやつればみ(ごく貧相に)、ただありなるやはあるべき(平凡な格好で出仕できるものではありません)。

さまざまに、*われ人にまさらむと(役人は皆、さまざまに自分が人に優ろうと)、*つくろひ用意すべかめるを(装束を工夫し香を焚き染めて身繕いを凝らしそうなものだが)、かくかたはなるまで(このように不都合なほど)、うち忍び立ち寄らむものの隈も(人目を忍んで女の家立ち寄ろうかと物陰に隠れても)、しるきほのめきの隠れあるまじきに(その香が漂って暴露してしまうので)、うるさがりて(鬱陶しくて)、をさをさ取りもつけたまはねど(中将は念入りに香を焚き染めはなさないが)、*「われ人にまさらむ」という意識は<見栄を張る>ということだが、またそれは実際に各人の虚栄心を刺激し、傍目には無意味な競争を呈することもあるだろうが、基本的には、そうした張り合いは御覚え目出度きを得るためであり、それは実利と結びつくものだ。そして、「御覚え」という評価を下す側にとっても、そうした文化意欲は技術や意匠の発展を促し、以て経済を刺激するのであり、またそれ以前に世の栄を寿ぐという様式自体が体制の維持安泰を示す祭事であり、政治家の基本姿勢だ。*「つくろふ」は<体裁を整える→装束を揃える>。「用意す」は<身支度をやる>。しかし、此処の文意は「香のかうばしさぞ」と話題を設定された文脈の中で読むべきものらしく、「装束を揃えて身支度する」ことが<香を焚き染めて身繕いを凝らす>ことを意味していると承知していないと、下文の「をさをさ取りもつけたまはねど」が何を言っているのか分からない、という文というより語り口で、現代語文としては<香の焚き染め>を明示補語せざるを得ない。

あまたの御唐櫃にうづもれたる*香の香どもも(多くの御衣装箱に仕舞われて香木の香りが移った着物類も)、この君のは(この中将君のものは)、いふよしもなき匂ひを加へ(えも言えぬ匂いが加わり)、 *「香の香ども」は<かうのかども>ではなく「かのかうども」と読みがある。「かう」が<香り>という抽象名詞で、「か」が<香る物>という具象名詞かとも思ったが、「かうども」という言い方からすれば此処では逆の語用で<香りが付いた着物類>という言い方のようにも見える。が、是は<忍ばせた香木の香りがついた着物類>とも読める文だ。まあはっきりしないし、厳密な語の定義はないのかも知れない。が、当時の知識人は意外に理屈っぽかったような気がしないでもない。

*御前の花の木も(曹司の前庭の花木の風情にしても)、*はかなく袖触れたまふ梅の香は(春の梅の頃には、一度お抱きになった中将の甘い残り香が)、*春雨の雫にも濡れ(男の若い思い切りに女身を火照らせたので)、身にしむる*人多く(忘れられない召人が多く控え)、秋の野に*主なき藤袴も(秋のフジバカマの頃には、亭主に飽きが来た中臈までも)、もとの薫りは隠れて(家庭を顧みず)、なつかしき追風(中将君の通る残り香に)、ことに*折なしからなむまさりける(何か良い事が起こりそうと期待を膨らませるのです)。 *「御前(おまへ)」は冷泉院の中将君曹司の前庭、なのだろう。「御前の花の木も」以下の言い回しは古歌を下敷きにした風情豊かな演出をしているらしく、それは取りも直さず、源中将君が情緒の素養に長じた優美な文化人だという人物像を印象付けようとする作者の工夫なのだろう。が、無教養の私は手こずりそうだ。 *「はかなく袖触れたまふ梅の香」は<「色よりも香こそあはれと思ほゆれ誰が袖触れし宿の梅ぞも」(古今集春上、三三、読人しらず)。>が参照指摘されている。「色」は<表情>だが、広く<目に見える色形>を言うらしい。「あはれ」は<印象深い=優れている>。「思ほゆ」は<思われる>と古語辞典にある。「香こそ」を受けた已然形「思ほゆれ」は<思われるものだ>という言い方。「袖触る」は<情交する>。「袖振る」は<別れる>。「たまふ」の敬語遣いは、中将が召人を<お抱きになった>と言っているのだから、「梅の香」は中将の移り香が女に付いたものか、梅香を焚き染めた女かのいずれかだが、此処では双方が互いに受けた印象と読んで置く。で、「誰が袖触れし」で一気に「あはれ」が梅香を焚き染めていた女を懐かしむ筋になる。といっても、それが本筋だが、「色よりも」が俄然イヤラシイ響きを持って来るところが見事だ。「宿の梅」は旅先で宿居した家の庭の梅の木。「ぞも」は<～というものでもあることだ>という列挙で、本来は春の張る命を寿ぐ梅の木を、別の感慨を持って味わう趣の句、なのだろう。などと多弁を弄しては情緒もあったもんじゃないが、当時の読者はこの下半身が痺れる歌の引き合いに、此処の文を官能小説として読んでいた、と思うだけで楽しい。 *「春雨の雫にも濡れ」は<「匂ふ香の君思ほゆる花なれば折れる雫に今朝ぞ濡れぬる」(古今六帖一六〇〇 伊勢)>が参照指摘されている。「花」の「折れる雫」は、大人の女を感じさせる。 *「人多く」は、何しろ冷泉院が美女ばかりを中将の周りに侍らせた、というのだから羨ましい限りだ。中将君は自分の存在意義に疑念を持ち自殺願望もあるようで、元服も嫌がって人間関係を面倒がる非社交的な性格だったようだが、色事自体は情緒風情も含めて好きこそ物の上手なれではあったらしい。 *「主なき藤袴(ぬしなきふぢばかま)」は<「主知らぬ香こそ匂へれ秋の野に誰が脱ぎかけし藤袴ぞも」(古今集秋上-二四一 素性法師)>が参照指摘されている。「藤袴」は<キク科の多年草。山野・川岸などに生え、また庭に植える。茎は直立し、高さ約 1m。葉は対生で、普通三深裂する。八、九月、淡紅紫色の頭花を枝先に密につける。生乾きの時芳香がある。秋の七草の一。古名、ラニ、ラン。漢名、蘭草。[季]秋。>と大辞林にある。ウェブ上の幾つかの画像を見ると、フジバカマの花は筒状の花弁房から二本のヒゲが延びていて、それが袴の結び紐のようで、それで脱ぎ捨てた袴に見立てられたのだろう。「誰が脱ぎかけし」の「誰が(たが)」は春の梅の香で引いた「誰が袖触れし」と意味は同じで、目の前の梅や藤袴は自分が抱いた女とは別物だが、その風情に自分の女を思い出す、という歌筋だ。それに、「主知らぬ」が単に<独身者>ではなく<人妻の浮気>を言っているとすると、中将

君は年増泣かせでもあったという艶談で、読者は更に喜んだことだろう。*「をりなしからなむ」は<「折(良い機会)」「為す(にする)」「かり(くあり、ということになる)」「なむ(といいな)」>という期待感、なのだろう。

[第四段 匂兵部卿宮、薫中将に競い合う]

かく(このように源中将が)、いとあやしきまで人の*とがむる香にしみたまへるを(とても不思議なくらいに女が気懸かりになる体臭を持っていらっしゃるのを)、*「とがむ」は<非難する。責める。問い質す。>の他に<注意を向ける。怪しむ。>という語用があるらしい。が、「怪しむ」にしても、ただ何かに気付く、というよりは、隠し事の意図に気付く、という語感で、此处での語用には馴染まない印象を受ける。が、この言い回しは<「梅の花立ち寄るばかりありしより人のとがむる香にぞ染みぬる」(古今集春上-三五 読人しらず)>が参照指摘されていて、女の移り香で妻に浮気がばれた、という戯れ歌を引いた軽口調らしい。そういう砕けた話題を演出している艶笑譚なのだから、この「人」は<女>と言って置く。

兵部卿宮なむ(兵部卿宮なるが)、異事よりも挑ましく思して(他の事より特に競ってみたいくお思いになって)、それは(といっても宮は源君のような体臭は無いので、それは)、わざとよろづのすぐれたる移しをしめたまひ(わざわざあらゆる芳香を布に焚き染めなさって)、朝夕のことわざに合はせいとなみ(朝夕の日課として調合を試しなさるということ)、

御前の前裁にも(二条院の庭先に於いても)、春は*梅の花園を眺めたまひ(春の花は形より匂いということで、桜より梅の花見を若い女を侍らせてしなさり)、*「梅の花園を眺めたまひ」は漢詩か古歌を下敷きにした言い回しに見えるが、何の注釈も無い。それでも、この「梅の花園」が庭の梅の木自体ではなく、いや梅の風情を含めたとしても、それに掛けた<若女房たち>を言う洒落語用であるとは読むべきなのだろう。即ち、源中将の春の庭の風情は「はかなく袖触れたまふ梅の香は春雨の雫にも濡れ身にしむる人多く」と若い召人に囲まれた艶めかしさだったのであり、この「花園を眺めたまふ」は兵部卿宮も源君を真似て<女を連れ立って花見をなさる>という意味の隠語めいた言い回しでなければ、文脈が通らない。

秋は*世の人のめづる女郎花(それに飽きると、秋には風情があると評判のオミナエシみたいな黄色い声の若女房や)、*小牡鹿の妻にすめる萩の露にも(若い男にありがちな新妻との情事に耽ることにも)、をさをさ御心移したまはず(少しも興味をお持ちにならず)、*「世の人のめづる女郎花」の言い回しは<「名にめでて折れるばかりぞ女郎花我落ちにきと人に語るな」(古今集秋上-二二六 僧正遍昭)>が参照指摘されている。「名に愛づ(名が気に入る)」の「名」とは、「女郎花(をみなへし)」という花が秋を代表する花だという<評判、名声>のことで、その花の<名前>のことではない。だから僧侶の私が、その花を折って持ち帰ったからと言って、女との色道に墮落したなどと揶揄するな、という冗句だろうか。こういう余興めいた艶笑を抜きにしては、「女郎花」を殊更に「世の人のめづる」と秋を代表する花のように言うのは不自然なのだろう。オミナエシは秋の七草の一つではあり、黄色く群生すれば確かに秋の風情ではあるのだけれど、その全てではなく一場面に過ぎない。*「小牡鹿(さをしか)」は<雄ジカ>のことらしい。「小牡鹿の妻にすめる萩の露」は<「わが岡に小牡鹿来鳴く初萩の花妻問ひに来鳴く小牡鹿」(万葉集八-一五四一 大伴旅人)>が参照指摘されている。シカはハギが花を咲かせる秋が発情期ということで、オスがメスを求めてよく鳴いたり、オス同士が角をぶつけ合ってメスの獲得を競うとかで、雄ジカが目立って、その雄鹿に目を遣ると側に咲く萩の下露を舐めている、みたいな秋の風景。「岡(をか)」は「外(ほか)」に通じる語らしく、本邸とは別の別邸や別荘地または所領地などを示すらしい。「やまとうた」サイトの「千人万首」編の「大伴旅人」ページの説明に拠ると、この別邸は大宰府の帥邸のことらしく、亡き妻を偲ん

で若い頃の華やぎを懐古するような趣きらしいが、決して湿っぽい詠み方ではなく、若さを寿ぐ明るい気分で詠んでいるように思う。「さをしか来鳴く」は<雄鹿が来て鳴く>だろうが、「来鳴くさをしか」は<来て鳴くって、そういうワケか>というダジャレの大喜利だろう。こうした洒落語用の気分を最大限捨う努力をせずには、この洒落つ気満載の記事は読めない。文意は洒落語用の中にあるのであり、字面を言い換えても意味が通らないし、部分逐語訳は文意上の誤訳を必ず呈する。まして、此処の箇所のように引用参照が広く定説として認められているものなどは、その引用意図を汲んだ文意の定説を早く確立して、標準訳文を広く一般読者に提供することが研究者の使命ではないのか。極論すれば、こういう文は現代語文への言い換えが不可能な、歌に準ずる類のもので、字面の言い換えはせずに、意識と断って、意識以外には言い換え文が成立しない旨を注釈で詳しく説明する、という態度が求められる、と思えてならない。尤も、一般読者が勝手に解釈を遊べる、という意味に於いては<野放図>も悪くは無いのかもしれないが、それでも標準訳文は示して欲しい。

*老を忘るる菊に(歳を感じさせない若々しい菊のように気品ある中堅女房や)、*衰へゆく藤袴(盛りは過ぎたが老練な色気を放つ藤原家筋の亭主持ちや)、ものげなき*われもかうなどは(さほどには身分の無い、まだ我もと色気を見せる後家などと)、いとすさまじき霜枯れのころほひまで思し捨てずなど(相当に高齢で白髪交じりの古女房までお見捨てなさらず控えさせるような御座所でのありさまで)、わざとめきて(殊更に)、香にめづる思ひをなむ(香を愛し、それにまつわる御趣向で)、*立てて好ましうおはしける(中将に張り合って女遊びを愉しんでいらっしやいました)。 *「老を忘るる菊」は<「皆人の老いを忘るといふ菊は百年をやる花にぞありける」(古今六帖一一九四紀貫之)>と参照指摘がある。重陽節に宮中では「菊花の宴」が催されたと「風俗博物館」サイトの「六条院四季の移ろい」トピックの「長月(ながつき・九月)」ページに説明があるが、菊の薬効については蚊取線香のキンチョーの社名が「大日本除虫菊株式会社」であることのほうが日常的には馴染みがある。尤も、現在の除虫剤の薬効成分は除虫菊から採取された成分とは別の合成物質らしいが。序に言えば、菊の薬効は菊自体ではなく、その花木から水溶した成分と古くから中国で考えられていた、とのことで、その意味では「菊正宗」のTVコマーソンが耳に残っている。「百年をやる」は<百年の長寿効果がある>だろうか。今では百歳も珍しくない長寿の国の日本なので<千年をやる>と言うべきかも知れないが、「百年」の方がただのお題目ではない誠実さが有るようにも見える。菊の芳香は甘さではなく気品だ。 *「衰へゆく藤袴」も必ずや下敷きになる漢語や和歌がありそうだが、参照指摘は無い。文脈に沿って意訳する。 *「われもかう」は<バラ科の多年草。山野に生え、高さ約1メートル。葉は長楕円形の小葉からなる羽状複葉で、互生する。8、9月ごろ、分枝した茎の先に暗紅紫色の短い花穂をつける。花びらはない。根と根茎を漢方で地榆(ちゆう)といい、止血・解毒に利用。のつち。《季 秋》>と大辞泉にある。当てられる漢字表記だが、「吾亦紅(私も気がある)」や「吾木香(木香の根は防虫剤だったらしい)」や「割木瓜(木瓜に図柄が似ている)」などがあるようで、此処での文脈では薬効つながりの洒落語用で「吾亦紅」をまだ色気のある<後家>にでも見立てたら面白そうだ。 *「立てて好ましうおはしける(特に好んでいらっしやる)」と結ばれる当文は、庭の風情に見立てた言い回しにはなっているが、描かれているのは庭の様子ではなく、宮の御前での生活ぶり、というか、中将に張り合った女遊びっぷりが述べられている。是が庭の草花の話だとしたら「香にめづる思ひ」で何が実現できるのか。仮に香り高い草花が植えられていたにしても、生花の香りは灰かだし一時的なものだ。その香りが身に染むのも、ごく一時的なことだ。本当に抹香臭くしたいなら、寺院のように香を焚けば良い。当文はそも、まともな草花の説明になっていないし、庭を描写していない。

かかるほどに(このように)、すこしなよびやはらぎて(少し優雅な柔らかい物腰で)、好いたる方に引かれたまへりと(女遊びに興味を引かれ過ぎていらっしやると)、世の人は思ひきこえたり

(世の人は兵部卿宮を思い申ししていました)。昔の源氏は、すべて(昔の光君は総じて)、かく立ててそのことと(こう取り立てて何か)、やう変り(異様なほど)、しみたまへる方ぞなかりしかし(入れ込みなさは無かったものですが)。

*源中将、*この宮には常に参りつつ(源中将はこの兵部卿宮の御座所には常に参上しては)、御遊びなどにも(楽器演奏などにも)、きしろふものの音を吹き立て(競い合って笛を吹いて)、げに挑ましくも(実に張り合って)、若きどち思ひ交はしたまうつべき人さまになむ(若い者同士で意識し合っている間柄なのでした)。 *「源中将」は「げんちゅうじゃう」と読みがある。 *「この宮」は二条院なのか、御所にあてがわれた部屋なのか、場所に限らず<宮のところ>なのか、分からない。

例の、世人は(例によって世間の人は御二人を)、「*匂ふ兵部卿、薫る中将」と(匂兵部卿と薫中将と並び立てて)、聞きにくく言ひ続けて(聞き苦しくも面白くその競い合いを噂して)、そのころ、よき女おはする、やうごとなき所々は(ちょうど年頃の娘御がいらっしゃる上流貴族の家々にあっては)、心ときめきに(御二人を婿にと期待して)、聞こえごちなどしたまふもあれば(縁談の申し入れなどをなさる向きもあって)、宮は、さまさまに(匂宮はあれこれと)、をかしょうもありぬべきわたりをばのたまひ寄りて(美人だと評判のありそうな相手には手紙を書いてごらんになって)、人の御けはひ(その人の素養や)、ありさまをもけしきとりたまふ(考え方も調べなさいます)。わざと御心につけて思す方は、ことになかりけり(が、この人ならと結婚相手にまでお考えになる方は特に居ませんでした)。 *「匂ふ兵部卿、薫る中将」は世間での通り名ということながら、本文で明示された呼称だ。「光る君」や「かかやく宮」も世評であり、個人特定がしやすいような呼称なので、支障がなければ私も使いたい。

「*冷泉院の女一の宮をぞ(冷泉院の第一内親王を)、さやうにても見たてまつらばや(妻に娶りたいものだ)。かひありなむかし(あのような絶品と暮らしたら男冥利に尽きて、さぞ生まれた甲斐があるというものだろう)」と思したるは(と匂宮がお思いなのは)、母女御もいと重く(母女御も藤原宗家の娘で身分が高く)、心にくくものしたまふあたりにて(仕付けに行き届いた家柄でいらっしゃるって)、姫宮の御けはひ(姫宮の御評判が)、げに、いとありがたくすぐれて(実に非常に敬われて優れていると)、よその聞こえもおはしますに(お噂が立てられていらっしゃる所に)、まして、すこし近くもさぶらひ馴れたる女房などの(まして身近に仕え馴れている女房などが)、くはしき御ありさまの、ことに触れて聞こえ伝ふるなどもあるに(詳しい御様子を事に触れて申し伝えてくる事もあるので)、いとど忍びがたく思すべかめり(いっそう恋情を募らせていらっしゃるようです)。 *「冷泉院の女一の宮をぞ」は注に<以下「かひありなむかし」まで、匂宮の心中。「さやうにて」は、妻としたい意。>とある。当章一段に「故致仕の大殿の女御と聞こえし御腹に、女宮ただ一所おはしける」とあった弘徽殿女御腹の冷泉院の一人娘のことなのだろう。「冷泉院の女一の宮」と内心文でも呼称するのか、と堅苦しくも感じたが、他に言い様も無いような気もする。

[第五段 薫の厭世観と恋愛に消極的な性格]

中将は、世の中を深くあぢきなきものに思ひ澄ましたる心なれば(中将は世の中を深く理不尽なものを見定めていたので)、「なかなか心とどめて(なまじ本気に女を愛せば)、行き離れがたき思ひや残らむ(出家を妨げる未練が残る)」など思ふに(などと考えて)、「わづらはしき思ひあ

らむあたりにかかづらはむは(恋愛に心を惑わすのは)、つつましく(避けたい)」など*思ひ捨てたまふ(などと良家からの縁談話を受け付けずにいらっしやいます)。*「思ひ捨つ」は<見過ごす>。前段の「そのころよき女おはするやうごとなき所々は心ときめきに聞こえごちなどしたまふもあれば」という振りを受けての、中将の場合の語りだろう。

さしあたりて、心にしむべきことのなきほど、さかしだつにやありけむ(今のところ本気になる相手がいないので悟ったような顔をしているのかもしれませんが)、*人の許しなからむことなどは(親が勧める縁談以外は)、まして思ひ寄るべくもあらず(一向に考えようとしません)。*「人」は<親>らしい。親は入道宮だ。

*十九になりたまふ年、三位の宰相にて、なほ中将も離れず(薫君は十九歳にお成りの年に三位の参議に出世して中将も兼務しています)。帝、後の御もてなしに(帝や後の親しい御接しぶりに)、ただ人にては、憚りなきめでたき人のおぼえにてもものしたまへど(臣下としては側近の高貴な人という評判でいらっしやったが)、心のうちには*身を思ひ知るかたありて(中将自身は出自に疑念を持つ向きがあつて)、ものあはれになどもありければ(もの悲しい気分もあつたので)、心にまかせて(興味本位に)、*はやりかなる好きごと(軽々しい恋文をだすのは)、をさをさ好まず(少しも気が進まず)、よろづのこともてしづめつつ(万事落ち着いた態度で)、おのづからおよすけたる心ざまを(自然に大人びた性格だと)、人にも知られたまへり(世間にも思われていらっしやいました)。*「十九になりたまふ年」とは如何にも唐突な物言いに聞こえる。一段に「十四にて二月に侍従になりたまふ」とあつた後は、匂宮と女遊びを張り合いながら、一方では厭世観もあつて、本気で所帯を構える気は無いままに暮らしている、といった生活態度が語られて来たが、年を追つての具体描写は是と言つて無いままの、行き成りの五年後とは恐れ入る。脱稿が無いとしたら、何らかの構成意図が作者にあつての語り口と思う他は無く、何れにしても読者は是を読み進む他は無いワケだ。*「身を思ひ知るかた」は注に<出生に秘密について知つたこと。>とある。「思ひ知る」は<考え至る>のではなく、何か実際の事柄でその背景の事情を<身に沁みて知らされる>という語感だと思つたが、そういう経緯は語れていない。となると、「思ひ知るかた」の「かた」が効いて来て、そういう<向き、傾向>という性格とか考え方を言つている、のだろうか。厭に成るほど分かり難い言い方、にしか私には見えない。*「はやりかなる好きごと」とは具体的に何を指すのか。中将は情交自体は召人相手に盛んにしている。その意味では<手軽な色事>は日常であり、決して「をさをさ好まず(面倒がる)」ということはない。となると、この文は匂宮との対比を述べているので、匂宮が「さまさまにかしうもありぬべきわたりをばのたまひ寄りて人の御けはひありさまをもけしきとりたまふ」ことを指している、と読むべきなのだろう。

*三の宮の(匂宮が)、年に添へて心をくだきたまふめる(年追うほどに思慕を募らせていらっしやるらしい)、*院の姫宮の御あたりを見るにも(冷泉院の姫宮の御人柄を思うにも)、一つ院のうちに(同じ院邸内に)、明け暮れ立ち馴れたまへば(日々の暮らしをし続けていらっしやるので)、ことに触れても(日頃の出来事について)、人のありさまを聞き見たてまつるに(姫宮の様子を聞いて思い申し上げるに)、*「三の宮」と、此処で呼称を変える意図が何かあるのだろうか。まあ、話題によって関係者は変わるし、その関係者との間柄を良く示す呼称を使うのは当然だろうが、此処では「兵部卿宮」でも「匂宮」でも特に違和感はないような気がする。とりあえず、私は便利な<匂宮>を使つておく。薫君が19歳で参議兼右中将とのことなので、匂宮は20歳で兵部卿ということになる。薫君が14歳で右中将になつていたとあつたので、匂宮の兵部卿就任も同年とすれば、互いに同職で五年目を迎えたことになる。まだ年齢自体は若い、同じ生活様式を五年も続ければ、自分なりの型のようなものが出来上がつて来るのだろう。*「院の姫宮の御あたりを見るにも」

は注にく主語は薫。薫は冷泉院の対の屋に部屋をもっている。>とある。ところで、この「院の姫宮」は当章一段に「故致仕の大殿の女御と聞こえし御腹に女宮ただ一所おはしける」と語られた女宮だろうが、一体何歳なのだろう。冷泉院はこの年で48歳になっている筈で、退位は二十年前の28歳の時だった(若菜下巻二章一段)。その退位時にこの姫宮が生まれていたのなら21歳以上になる筈だが、どうもその辺の経緯が釈然としない。いや、どういう経緯でも明示されれば、そういうものとして納得するだろうが、明示しないことに意図がありそうところが釈然としない。因みに、弘徽殿女御は49歳、秋好中宮は57歳、今上帝40歳、入道宮40歳、明石中宮38歳、源殿45歳と、基本的には体制に大きな変動もないままに世代交代が進んだようだ。ただ、少し前の話という設定で現代劇を語ってきた作者にとって、時の受領の台頭は強く意識されていたし、それに伴う政治情勢の変化が、それ自体を語るものではないが、その世情を語るものとしては描かれて来たのであり、その延長線上で次世代の動向を語るというのは、現在の同時進行の世情に限りなく近づくような、客観視の難しい主題になるかの印象がある。

「げに、いとなべてならず(なるほど大した人らしい)。心にくくゆゑゆゑしき御もてなし限りなきを(卒の無い教養ある御物腰はこの上なく素晴らしいということなので)、同じくは、げにかやうなる人を見むにこそ(どうせなら確かにこのような人を娶る事こそ)、生ける限りの心ゆくべきつまなれ(生涯楽しく暮らせる端緒になるだろう)」と思ひながら(と薫君は思いながら)、

おほかたこそ隔つることなく思したれ(冷泉院はおよそのことは拘り無くお考えのようだが)、姫宮の御方ごまの隔ては(姫宮の御用向きに関しては)、こよなく気遠くならはさせたまふも(非常に私を遠ざけるのを慣わしとしていらっしゃるのが)、ことわりにわづらはしければ(当然であり気が引けるので)、あながちにもまじらひ寄らず(あえて近付こうとはしません)。

「もし、*心より外の心もつかば(もし子供を儲けないという意に反して結婚したい気になったら)、我も人もいと悪しかるべきこと(自分も相手も不幸になるだけだ)」と思ひ知りて(と考え着いて)、もの馴れ寄ることもなかりけり(むしろ近づく機会を敬遠していました)。*「心より外の心」は注にく『完訳』は「出家の素志に反して」と注す。>とある。「出家の素志」と言えるのかもしれないが、私の感想では自殺願望、または根絶やし願望というか、自分で悪い縁を終えたい、みたいな気持ちに見える。若出家で妻を若後家にする、ということもあるかもしれないが、むしろ子供を儲けない、血を絶やす、ということで、およそ結婚に自分は縁が無い、という考えかと思う。だから子供を儲けない情交や射精は自分自身の生理としては自然な事、ということになるのかも知れない。情事は好きだが、人は愛さない。典型的な善悪思考で、私にもその性向が強く、個人が便利に暮らせる現代人には結構多い気質のような気もするし、その気質同士でも男と女が惹かれ合って楽しく過ごすことに問題は無いし、何処まで行っても個人は個人で、他人と折り合いをつけて生活するのは大変だが、それでも私は思考の前に人は有機存在していると思うし、子供を愛せない人生が豊かだとは思えない。

我が(薫君は自分が)、*かく(このように冷泉院や帝や親王方と親しく)、人にめでられむとなりたまへるありさまなれば(世間から敬われるようになっていらっしゃる状態なので、大変お持てになり)、*「かく」は「院にも内裏にも召しまとはし春宮も次々の宮たちもなつかしき御遊びがたきにてもなひたまへば」(一段)と語られた事情を受けているのだろう。「御遊びがたき」は数年前までのことかも知れないが、王家に親しく馴染んでいる事は変わらない筈だ。

はかなくなげの言葉を散らしたまふあたりも(少し気に入っては口説き散らしなざる相手の女たちも)、こよなくもて離るる心なく(その場限りで別れる気は無く)、なびきやすなるほどに(情

人になりたがるので)、おのづからなほざりの通ひ所もあまたになるを(薫君は本気ではないので、どうしても途絶えてしまう通ひ所も多くあったが)、

*人のために(薫君はそういう女たちを)、*ことごとしくなどもてなさず(正規の妻として迎えること無く)、いとよく紛らはし(上手く言い繕って)、そこはかたなく情けなからぬほどの(そういう体裁は別にして好きな気持に嘘は無いという思わせぶり)、なかなか心やましきを(あっさり諦めも付かずに)、思ひ寄れる人は(少しでも薫君の厚情に期待を寄せる女は)、誘はれつつ(誘われるままに)、*三条の宮に参り集まるはあまたあり(入道母宮の三条宮邸に参上して女房仕えに集まる者が多く有りました)。*「人」は<相手の女たち>のことらしい。「人のために」の「ために」は<~に関して>だろうか、分かり難い語用だ。*「ことごとしくなどもてなさず」の文意は、注に<『完訳』は「情交関係はあっても、女房程度の女を格別妻のように扱わない。それが常識人薫の対処法」と注す。>とある。「常識人」という言い方には少なからず違和感はあるが、確かに、身分社会の秩序認識として、各自がそれぞれの身分を自覚して、それに応じた役割を演じなければ社会機構から排除される、というのは人間社会に普遍的な原理で、何も平安時代や封建制に限ったことではない。が、その秩序を乗り越えるのが、戦争による他秩序の強制を別にすれば、権威者によって認められて出世して自分の階級が上がるという普通の組織人の生き方であり、男なら仕事の成果で認められる場合が多いだろうし、女なら有力者の情人になるのも有効な方法であり、ただの情人でもそれなりの対価は受けられるが、妻の地位を得ることで社会的な地位とは即ち身分が上がるのであり、その数少ない機会を中流以下の家柄の女が克ち取ろうとするのも、普通の<常識的な>行動規範だ。なお、此処で言う<男>も<女>も<権威者>も<有力者>も基本的には役割認識に於ける語用だ。これらは今でも、というか組織にはいつでも必ず必要な構成素分で、封建時代にはそれらが世襲されていた事に特徴があるだけで、集団運営の主要な原理であることは今も変わらない。で、当然、有力者は権威の保持を考えれば自己の勢力拡大に利する家柄の女を妻に迎えたいし、情に流されて非力な家の女を妻に迎えるのは<常識的に>避ける筈だ。が、薫君はそういう<常識的な>価値基準で召人を本気で結婚相手に考えない、という面も否定しないが、それだけではなく、結婚自体を避けているように語られて来ている、かと思う。*「三条の宮に参り集まるはあまたあり」は注に<薫の本邸。母女三の宮のいる邸。薫との情交関係を求めて女房となる人。召人が大勢いると語る。>とある。召人なり郎党なり、家人を多く抱えるのは男の器量とか甲斐性とか言い、その個人の度量や魅力を褒めたりするが、何と言っても基本は財力だ。薫君自身の三位参議兼中将という身分も相当な扶持に与るだろうが、特に帝の親任篤いという事情は、口利きを頼む多くの有力者からの貢物が絶えなかったことだろう。

つれなきを見るも(そうした召人たちは、薫君の不熱心な態度を見るのも)、苦しげなるわざなめれど(つらいことのようにだったが)、絶えなむよりは(通いを待って途絶えてしまうよりは)、心細きに思ひわびて(心細さが軽いかと思ひ悩んで)、さもあるまじき際の人びとの(正妻に成れる見込みの無い身分の女たちには)、はかなき契りに頼みをかけたる多かり(袖摺り合った薫君との薄い縁に将来の生活を頼ろうとする者が多いのでした)。

さすがに(何しろ薫君が)、いとなつかしう(とても優しく)、見所ある人の御ありさまなれば(出世間違い無しの御威勢なので)、見る人(情交した女たちは)、皆心に*はからるるやうにて(皆自分の欲に目が暗んで)、見過ぐさる(召人という冷遇に目を瞑るのです)。*「はかる」は「謀る」で<騙す>。「心に謀るる」は<自分の気持ちに騙される=論理に客観的合理性を欠く=欲に目が暗む>。「見る人皆心にはからるるやうにて見過ぐさる」の文意は、注に<『集成』は「情を交わす女は皆、自分の気持ちにだまされるような具合で、(そういう冷淡な薫を)つい大目に見てしまう。「る」は自発の意」。『完訳』は「薫はその好きな

らざる人柄で世人の信望を得、多くの女性関係を持つ。しかし召人との関係では結婚や好色の対象にならない。薫の道心の破綻しないゆえんである」と注す。薫の道心と好色心のバランスは召人によってとられている。>とある。「道心と好色心のバランスは召人によってとられている」という見方は面白い。尤も、屈折した疎外感があると言っても、逆にそれが子育ての為の家を構えない口実になって、健康な若い男の旺盛な性欲を、女に事欠かない恵まれた生活環境で奔放に発散させた、という事情は、まるでポルノのシリーズ物の設定のように、一つの男の理想像だ。私は、バランス感覚や論理の整合性で深読みしようとする読者姿勢に病的な印象を受けるが、そういう考察を作者がしなかったとは断言できない。ただ、「召人との関係では結婚や好色の対象にならない」というのは、「結婚」については基本的な男の都合の傾向は左様に成り易いが、それも絶対視は出来ず、「好色」文化については召人や他の女房との歌詠みや管弦遊びを男がしない筈は無く、というより、それは上級女房の主たる勤めであり、其処での応酬で紡ぎ出されたものこそが王朝美だろうから、『完訳』の解説は疑問だ。

[第六段 夕霧の六の君の評判]

「*宮のおはしまさむ世の限りは(母宮のご存命中は)、朝夕に御目離れず御覽ぜられ(朝夕に直接お目に掛かり)、*見えたてまつらむをだに(お世話申し上げねばならないので)」と思ひのたまへば(と薫君が三条宮邸に日参して女遊びに耽る考えを仰るので)、 *「宮」とは、薫君の母宮の入道宮のことらしい。注には<以下「見えたてまつらむをだに」まで、薫の詞。>とある。「思ひのたまへば」とあるので内心文ではなく発言文で、源中将は母親を「宮」と呼称していたようだ。それにしても行き成り「宮」と言われると、誰の事なのか分かり難く、暫く先読みしないと文意が掴めない。分かり難いし馴れない書き方だ。 *「見えたてまつらむをだに」の「だに」には義務感が示されていて、下に省かれたのはくだから当面は結婚しないつもりだ>となるような言い方に見える。が、上文で三条宮邸には多くの召人が参集していたと語られたのを受けた文脈として是を読めば、そういう方便で源中将は<女遊び>を公言していた、と聞こえる。

右の大臣も(源右大臣も)、あまたものしたまふ御女たちを(大勢儲けていらっしゃる娘御たちを)、一人一人は(一人は匂宮に一人は薫君に嫁がせ申したいと)、と心ざしたまひながら(と意向なさっていらっしゃりながら)、え言に出でたまはず(女遊びを競っていらっしゃる今のお二人には、とても結婚を切り出し申しなされません)。

「*さすがに(それにこの縁談は近親の身内同士のことであり)、*ゆかしげなき仲らひなるを(政治的には拡大政策にならない内輪話なのだが)」とは思ひなせど(とは立場上では思うものの)、「この君たちをおきて、ほかには(この二君を置いて他には)、なずらひなるべき人を求め出づべき世かは(それに匹敵する逸材が期待できるだろうか)」と思しわづらふ(と思ひ悩みなさいます)。*「さすがに」は<「さ」それは><「す」そうだ><「が」が、別の視点で見直して><みるに「に」>という、前項の成立する理由や事情を多方面から検討して深く考察を試みる言い方、かと思う。で、それ自体では内容が示されないの、分かり易い論旨展開を図るなら本来は、その検討内容によって<しかし><同時に><その上><そもそも><とにかく><何しろ>などという副詞や接続詞を加えてから以下の本旨を進めるという構文があって然るべきなのだろうが、それが省かれるという奇妙な語用が一般化している曖昧語で、現代語ではとにかく元々優れているので>という語用にほぼ限定されつつあるようだが、古語では初期化状態のまま、多様な分化にその都度対応して言い換えなければ成らないという<味わい深い>語だ。 *「ゆかしげなし」は訳文に<面白味が無い>とある。「ゆかし」は「行かし(行きたい)」が原義と古語辞典に説明があり、「ゆかしげ」はざっと<好奇心を持たせる様子>らしく、「ゆかしげなし」は<面白味が無い>という意味で方向性は間違い無さそう。が、此処の「ゆかしげなし」は源殿が

「右の大臣」の立場でした政治的発言と明確に位置付けた方が、より分かり易く面白い。与謝野訳文にはく内輪どうしのことであって、世間の聞こえもおもしろくないとは大臣も知っている>というように当文の文意を言い換えてあって、是に従うと共に、より政治性を明示して置きたい。「思ひなす」の「なす」という作意形成語が源殿の政治家としての情勢判断である事を示している、かと思う。源殿から見れば、匂宮は今上帝の第三王子とはいえ、血筋では腹違いの妹腹の御子、とは即ち甥であり、薫君は朱雀院の第三皇女腹の御子とはいえ、要するに弟である。甥や弟に娘を嫁がせる事自体は穏便な運びで安泰を示す慶事だ。が、問題は、その甥や弟が他家勢力との独自の血縁を築いていて、良家の縁組が更なる勢力拡大を見込めるなら望ましいが、全人脈が六条院に連なる穀潰しでは先細りが懸念される。勿論、勢力拡大は正妻だけの縁組に頼ってもいられないし、多妻制に因る縁や、官人としての功績自体でも図るべきものだが、当面の栄華だけで生きていられるのは若い内だけだ。老年に差し掛かろうかという源殿に、そうした懸念が有っても当然だ。

*やむごとなきよりも(尊家の藤原姫である正妻腹の娘御たちよりも)、*典侍腹の六の君とか(冷泉帝の典侍であった藤原傍家筋の妾腹の六女とかが)、いとすぐれてをかしげに(とても抜き出て美しく)、心ばへなども*たらひて生ひ出でたまふを(気立ても申し分なく成長なされたのを)、世のおぼえのおとしめざまなるべきしも(母親の家柄の違いで世間から低く見られがちなのが)、かくあたらしきを(実に惜しいので)、心苦しう思して(残念にお思いになって)、一条の宮の(一条宮が)、さる扱ひぐさ持たまへらでさうざうしきに(子供を儲けなさらず寂しくしているので)、迎へとりてたてまつりたまへり(源殿は典侍からその六女を引き取って一条宮に御養女として家格を得るべく差し上げなされたのです)。*「やむごとなき」は「やむごとなし」の連体形で<高貴な人>という言い方だが、此処ではく藤原尊家筋の正妻腹の女>のことを言っているらしい。そう言われるとそんな風にも思えるし、他の意味ではなさそうだが、何でこんな曖昧な分かり難い言い方をするのが不思議でならない。藤原宗家の分家に対する圧倒的な優位を示す言い方なのかと、左様に言い換えて置く。*「典侍腹の六の君(ないしのすけばらのろくのみみ)」と此処で明示された。妾腹だから<姫>と呼ばないのだろうか。どうもよく分からない。*「たらふ」は「足らふ」で<足りている、十分に備わっている>。

「わざとはなくて(この六女は六条院で暮らしていれば、改まった機会では無しに)、この人びとに見せそめては(匂宮や薫君の目に付いて)、かならず心とどめたまひてむ(必ず気に入りなされるだろう)。

人のありさまをも知る人は(女の良さが分かる男なら)、ことにこそあるべけれ(特にそうなる筈だ)」など思して(などと源殿はお思いになって)、いといつくしくはもてなしたまはず(六女をあまり厳重に深窓に籠めなさらず)、今めかしくをかしきやうに(流行に敏感な)、もの好みせさせて(服や風俗に馴染ませて)、人の心つけむたより多くつくりなしたまふ(男が六女を話題に取り上げ易そうな機会を多く作り出さいます)。

[第七段 六条院の賭弓の還饗]

賭弓の還饗のまうけ(御所での正月十八日の弓競技の祝勝宴会の規模を)、六条の院にていと心ことにしたまひて(左大将でもある源右大臣は六条院にて特に盛大にと)、親王をもおはしませむの心づかひしたまへり(皇子たちまで御来席頂く予定で準備をしていらっしやいました)。「賭弓の還饗(のりゆみのかへりあるじ)」はく賭弓の儀式が終わった後、勝った方の大将が味方の軍を招いて催す宴。

>と古語辞典にある。「賭弓(のりゆみ)」はく平安時代の宮廷年中行事の一。射礼(じゃらい)の翌日、一般に正月18日、左右の近衛府(このえふ)・兵衛府の舎人(とねり)が行う射技を、天皇が弓場殿(ゆばどの)に出御して観覧する儀式。勝者には賭物(のりもの)を賜い、敗者には罰杯を課した。賭弓の節(せち)。>と大辞泉にある。「射礼」はく主に平安時代に宮中で行われた年中行事。正月17日に豊楽院(ぶらくいん)または建礼門の前で、天皇臨席のもとに親王以下五位以上および六衛府の官人が参加して射技を披露したもの。終了後には宴が開かれ、禄を賜った。大射(たいたし)。>とある。要するに<祝勝会>らしく、下文に「例の、左、あながちに勝ちぬ」とあるので、左大将である源殿が主語となる文のようだが、「六条の院にて」とあるだけで、その主人たる<源殿>ということは示されている、ということらしい。段落も後世の校訂なので、上文からの流れからしても源君が主語である事は文脈上自明なのかもしれない。が、源殿が左大将である事は普通の認識なのだろうか。源殿の左大将就任は右大臣就任よりも前の事だったように思え、若菜下巻四章二段などにあったのは誤記のような気もするが、もし若菜下巻当時に右大将から左大将に昇進していたのなら、当時源殿は26歳くらいで今は45歳だから、この年で二十年近くの座位になり、それはあまりにも長すぎるように思えるが、もし右大臣就任と同時だとしても、それ以前に右大将を兼務していたとすると、大将在位が如何にも長い。後進の指導が大臣の主たる責務の一つである事を思うと違和感を禁じ得ない。が、そう書かれている以上、この二十年来は概して世情の大勢に変化が無く安泰だった、と置いて置く。ところで、「賭弓」は儀式の様式よりも遊戯性が強そうで、であるなら、尚更その勝負は白熱しそうだ。「賭る(のる)」はく物を賭けて勝負する。>と古語辞典にあるが、「のる」は元々は「祝る」という占いごとで、品物もその結果を標す記念品だったものが、この「のりゆみ」で武芸を競うこととなったので、「のり」が結果の偶然性よりは実力を試す意味に変わって、品物が褒美の優勝賞品となり、「のる」が「伸る、乗る」という意味合いになった、ように勝手に考えてみたが、それに合致する「のる」の語源や語感に付いての説明には未だ出会った事が無い。また、是が新年の話題である事から、薫君が宰相中将になった19歳の翌年で、20歳の時の話(※)ということのようだ。 ※「20歳の時の話」と当帖を読む限りは考えていたが、後の竹河巻に於いてこの「賭弓の還饗」は薫君が中納言に昇進する年の一月の話題だった事が示されていて、中納言昇進は薫君23歳秋の時のことと知られているらしく、此処に<23歳春の時の話>と訂正しておく。また、冒頭概略も左様に書き換える。(2013年2月6日)

その日(その六条院の祝勝会に)、親王たち、大人におはするは、皆さぶらひたまふ(皇子たちで元服なされた方々は皆出席なさいます)。

*后腹のは(明石中宮がお産みなされた皇子たちは)、いづれともなく(どの方にしても)、気高くきよげにおはします中にも(気品があつて美しく着飾っていらっしやる中でも)、この兵部卿宮は、げにいとすぐれてこよなう見えたまふ(この兵部卿宮は本当にととても素晴らしくお見えになります)。 *「きさいばら」は注に<明石中宮腹の親王をさす。>とある。明石中宮腹と言うより、后腹と言う方が的確に社会性を示しているようにも思えるが、物語上の役割は明石中宮が分かり易い。

四の親王(第四親王は)、常陸宮と聞こゆる(常陸宮と申し上げて)、更衣腹のは(更衣腹なのは)、思ひなしにや(そういう思い込みもあつてか)、けはひこよなう劣りたまへり(印象がずいぶん劣りなさいました)。

*例の(いつものように)、左(左方が)、あながちに勝ちぬ(一方的に勝ちました)。 *「例の」はく例の通りに=いつものように>という言い方らしいが、賭弓はいつも左方が勝つ、ことになっていたのなら、それは此処の記事で知らされる私です。皆さんご存知のように、みたいな言い方をされても「賭弓」自体を知らない。

例よりは(しかも、例年よりは)、とくこと果てて(試合が早く終わって)、*大将まかでたまふ(源左大将は祝勝会の準備のために御所を退出なさいます)。 *「だいしゃうまかでたまふ」は注にく左大将夕霧。饗宴の準備のため退出する。>とある。左様に補語する。

兵部卿宮(第三親王の匂宮)、常陸宮(第四親王)、后腹の五の宮と(后腹の第五親王を)、一つ車に招き乗せたてまつりて(源殿は自分の車に招き乗せ申し上げなさって)、まかでたまふ(お帰りなさいます)。

宰相中將は(薫君は)、負方にて(負方の右中將なので)、音なくまかでたまひにけるを(静かに退出なさるところを)、

「親王たちおはします*御送りには(六条院に親王たちがお見えになる御接待役として)、参りたまふ*まじや(参加なさらねばなるまいぞ)」 *「おおんおくり」は<お見届け→御世話係→御接待役>なのだろう。 *「まじ」は<～してはならない>という否定認識を示す語だが、それに「や」という反語が付いているので、「まじや」は<～しなければならない>という強制語用となる、のだろう。

と、おしとどめさせて(と源殿は中將が他所へ向かうのを押し止めさせて)、*御子の右衛門督、権中納言、右大弁など(御子息の右衛門督、権中納言、右大弁などが)、さらぬ上達部あまた、これかれに乗りまじり(その他の高官たちをそれぞれの車に同乗させて)、誘ひ立てて(賑やかに誘い合っ)、六条の院へおはす(皆で六条院へ向かいなさいます)。 *「御子の右衛門督、権中納言、右大弁など」と源殿の子息たちが政府の要人を占めていることからして、源殿が実質で藤原宗家を担う立場であったような、自他共にそのように認識していたらしい実勢、みたいな印象を受ける。光君が藤原左家に近い立場であったことよりも、源殿は更に左家に深く根を張ったのだろう。ただ、光君が藤原右家に対しても王家の威光で優位性を保持していたのに比すと、源殿は明快に左家の立場で右家勢力と同等な地位で張り合う、という役割を担っていたように見て置きたい。六条院の管理は源殿の仕事だったのであるが、その権威は明石中宮の実家として継がれていて、中宮を主とした体裁を整えざるを得なかったはずで、源殿が唯一実質支配している夏の町でさえ、実際の運営は一条宮に任せていて、本当に自由になる所はほんの一角の自室だけだったような、それで満足していたような律儀さを、この人物からは感じる。

道のややほど経るに(御所から六条院までの道のりが少し時間が掛かる内に)、雪いささか散りて、艶なるたそかれ時なり(雪が少しちらついて風情のある夕方なのでした)。

物の音をかききほどに吹き立て遊びて入りたまふを(浮かれて笛を吹きながら貴公子たちが六条院にお入りになる光景は)、「げに、ここをおきて(本当に此処の他に)、いかならむ仏の国にかは(どんな有難い仏の国と言えども)、かやうの折節の心やり所を求めむ(こうした祝宴を楽しむ所は望めないだろう)」と見えたり(という目出度さでした)。

寝殿の南の廂に(六条院の正殿である南の春の町の寝殿の庭に面した南表の廂の間に)、常のごと南向きに(定型通りに南向きに)、*中少將着きわたり(座の主客である勝者の左方の近衛中將と少將が居並んで)、北向きにむかひて(それと北向きに対座して)、*垣下の親王たち、上達部の御座あり(列席招待客の親王たちと高官たちの座が設けられました)。 *「中少將着きわたり」の「渡る」という壯観さを示す表現からして、これらの「中將」や「少將」は複数名いたような印象を受ける。「官制大観」サイト

によると、中将は定員が平安初期は左右各一名で後に各二名となり、少将は当初の定員が左右各二名で後に各四名になった、とのこと。多く見れば、中小将総勢で六名いた勘定だ。 *「垣下」は「ゑが」と読みがある。「ゑが」は「ゑんが」に同じと有り、「ゑんが」は<朝廷または貴族の屋敷で催される饗宴(きょうえん)のとき、正客の相伴(しょうばん)をする人。えが。かいもと。接伴。>と大辞林にある。

御土器など始まりて(御祝杯などが始まって)、ものおもしろくなりゆくに(宴もたけなわと成って行くと)、「*求子」舞ひて(近衛武官が定番の求子を舞って)、かよる袖どものうち返す羽風に(その舞で揺れる舞人の袖々が打ち返す扇ぎ風に)、 *「求子(もとめご)」は<東(あずま)遊びの曲名。また、それに合わせる舞。求子歌。>と大辞林にある。「東遊び」は<上代、東国の歌舞の意。東国地方の風俗歌に合わせて舞う民間舞踊であったが、平安時代に雅楽の一曲として形式が整えられた。舞人は四人または六人。歌手八人の楽で演奏する。舞に駿河舞・求子(もとめご)舞があり、二つを舞うと諸舞(もろまい)、後者のみを舞うと片舞という。中世には廃れたが、江戸時代に再興され、宮中の祭儀や神社の祭礼に行われている。東舞(あずままい)。>とある。現在では東遊びは近衛の武官装束で舞う、ということのようだが、当時は正に近衛武官が宴席で舞う定番だったのだろう。この場面は正に近衛武官の祝勝宴会だ。また、「求子」舞いが語られた場面は、二十年前の冷泉院の退位、とは即ち今上帝の即位の時だが、それに続く立太子で明石中宮腹の第一親王が皇太子に就いたことで、明石一族の王家血筋への参画が実現したので、その願解きを光君一行が住吉大社に参詣した際の若菜下巻二章五段にく「求子」果つる末に、若やかなる上達部は、肩ぬぎて下りたまふ。>と描かれていた。「肩ぬぎて下りたまふ」という砕けた情景に「求子歌舞」が扇情的な内容なのだろうと推し量ったが、その情緒は此処でも「かよる袖ども(揺れる舞袖)」に言い表されているように思う。「肩ぬぎて」舞う東遊びの動画もユー・チューブにあった。

御前近き梅の(庭先近くの梅の)、いといたくほころびこぼれたる匂ひの(もうすっかり満開となっている匂いが)、さとうち散りわたれるに(ふと会場の廂に漂って来ると)、例の、中将の御薫りの(例の中将の御体臭が)、いとどしくもてはやされて(非常に引き立てられて)、いひ知らずなまめかし(言いようも無く風情豊かです)。

はつかにのぞく女房なども(僅かな隙間からこの光景を覗いている女房なども)、「*闇はあやなく(近衛の舞い姿はよく見えないので)、心もとなきほどなれど(不満だが)、*香にこそ(確かに躬恒が言ってあるように、この香りは)、げに似たるものなかりけれ(本当に中将以外の何者でもないと分かってしまう)」と、めであへり(と上気して言い合っていました)。 *「闇はあやなく」の言い回しは<「春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やは隠る」(古今集春上-四一 凡河内躬恒)>と参照指摘がある。「色こそ見えね香やは隠る(姿は見えないが香りは隠れない)」を下敷きにして「香にこそ」とオチを着けている。 *「香にこそ、げに似たるものなかりけれ」は<「降る雪に色はまがひぬ梅の花香にこそ似たる物なかりけれ」(拾遺集春-一四 凡河内躬恒)>と参照指摘がある。「求子舞」の場面から「御前近き梅」に繋げて、その「匂ひ」を前振りにして古歌に洒落るという名調子。で、最後にどちらも凡河内躬恒の歌ということで「げに」と下げる、という完成度。

大臣も(源大臣もこの弟君を)、いとめでたしと見たまふ(とても優れているとお思いになります)。容貌用意も(姿かたちや態度姿勢も)、常よりまさりて(負組の所為か、いつも以上に)、乱れぬさまに収めたるを見て(畏まって控え目にしているのを見て)、

「右の中将も声加へたまへや(右の中将も一緒に歌ったらどうです)。いたう客人だたしや(まるで客人みたいだぞ)」

とのたまへば(と仰ると)、憎からぬほどに(薫君は目立たぬ程度に)、「*神のます」など(「神のます」などと、求子のひとふしを唱和します)。 *「神のますなど」は注に<薫の詞。「神のます」は風俗歌「八少女」の歌句。『花鳥余情』は「此結句は若菜下巻のおなし筆法也」と指摘。『全書』は「ここに脱文ある如く装ってあるが、恐らくこの巻の作者の所為であらう。余情を深からしめる技巧の一種」と注す。>とある。「など」で当巻が結ばれること自体には、私は今のところ特別な違和感はない。「八少女」は「やをとめ」と読むらしく、古語辞典に<神社に奉仕し、神楽などを舞う八人の少女。>とある。神に祈る事と、生きることと、情交すること、が実際に近いものとして現実している、という土着の農耕社会の切ない生活感ヒトが地球上の生命体である限りは、どこかに記憶されているのだろう。ともあれ、「神のます」が<求子のひとふし>だと補語される与謝野訳文の、その補語が情緒を表現する的確さに敬服し、従いたい。

(2013年1月3日、読了)